「日々の理科」（第 2732 号）　2022,-1,-6

「お正月に遠くの山を望む（４）」

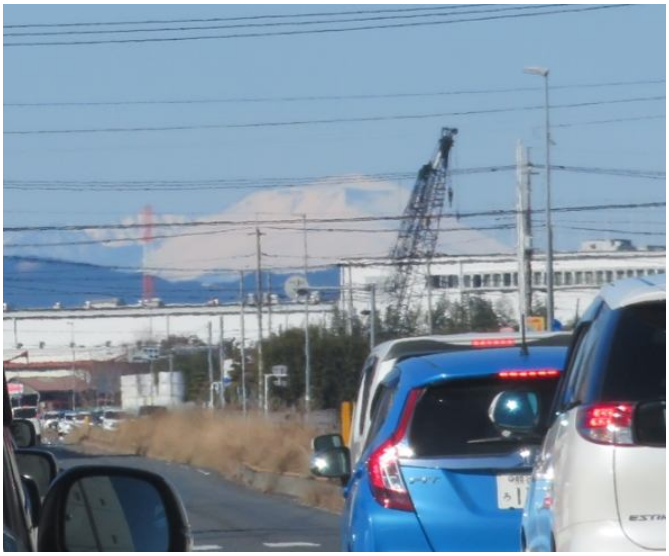
お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中　千尋　Chihiro Tanaka

１月２日の関越自動車は下り線も上り線も混んでいた。私は東松山 IC で下りようと思っていただ、その手前で結構な渋滞に巻き込まれてしまった。そのかわり、車が停まるたびに、遠くの山を撮影できた。

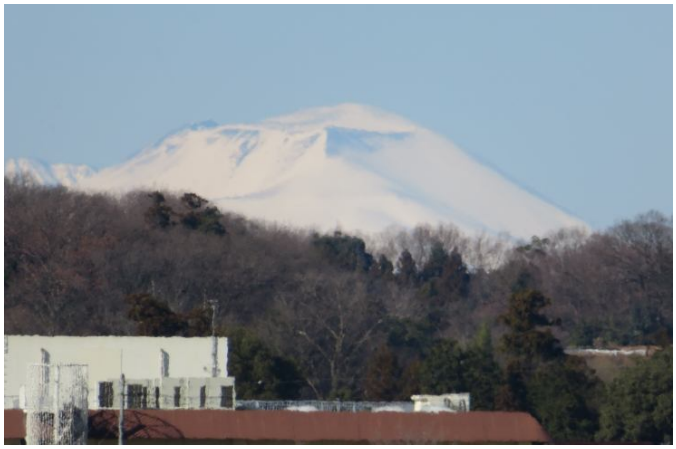
東松山 IC の手前で、遠くに形の良い山が見えた。方角と山容、雪の積もり方からして、上州武尊（じょうしゅうほたか）の可能性が高い。上州武尊には、大昔（20 世紀）に一度登ったことがある。



東松山 IC を下りたあとには、国道 254 号線を小川町方面に向かう。この道は、東京の本郷から池袋、川越、小川町、藤岡、下仁田などを通り、終点は松本市という、実は長大な国道である。国道からは、遠くに白い山が見えた。一見奥日光の男体山に見えたが、方角的に「浅間山」とわかった。

東松山から浅間が見えると思わなかったので、もう少し広い場所から見たいと思い、脇道を北に向かって車を走らせた。いかにも「埼玉の道」という感じだ。

15 分ぐらい「浅間探し」をした結果、小さな川を渡る橋の上で白い山を「発見」した。丘陵の雑木林越しに、雪の積もった山が見える。浅間だろうか？



望遠で撮影して確認してみた。浸食谷がほとんど見られない。間違いなく浅間山である。今でも噴火を繰り返す浅間は、浸食よりも堆積の速度のほうが大きいからである。均整のとれた山容の富士山にでさえ、たくさんの放射谷がある。関東平野から見える山で、これほど「浸食されていない山」は浅間意外にはない。